

団塊世代にとつての「千里第二」

三三回生 佐々木成人

現在、我国の出生数は年間二二〇万人を下回っている。一方嘗てベビーブーマーと呼ばれた我々団塊世代は、一九四七年(昭22)と四八年(昭23)にそれぞれ二六八万人、四九年(昭24)二七〇万人、五〇年(昭25)二三四万人と現在の倍の勢いで出生した。

この四年間だけで二千万人を超える人口を輩出し、この数は当時の我国総人口の十二%を占めていたのだ。そして今現在も、この四年間に生まれた世代だけが各歳別人口で二〇〇万人台を維持している。

半世紀前——一九五五年(昭30)前後に、この世代は一斉に小学校に入学し中学・高校と青春時代を共有して七〇年代の疾風怒濤の時を駆け抜けた。そんな我々も、今年満五六歳から五九歳——団塊世代の「定年」へのカウントダウンが始まろうとしている。

愈々来年から一斉に「還暦」を迎え、或いは各企業や官庁・団体などの第一線から退職することになるだ

ろう。そして、四年間続けて毎年二〇〇万人が六〇歳台に突入する。将来の医療や定年後の生き方に不安を感じさせる一方、経済界では企業社員や公務員に支払われる退職金の使い道に熱い視線が注がれている。これが、いわゆる「二〇〇七年問題」である。

さて昭和三十一年当時、吹田市千里山に居た多くのベビーブーマーの一人である私は、グレース幼稚園を卒園し千里第二小学校に入学した。(グレースの記憶は無くなってしまったが、卒園アルバム「おもいで」がリ版刷り！が手許に残っている。)

一年生と二年生の時は「分校」だったと思う。共に片山美千代先生だったが、当時のことはあまり覚えていない。三年生の担任は、竹原淳子先生。厳しい先生だったが何故か思い出があり、卒業時のサイン帳にフリジャのスケッチと共に「よく頑張った三年生」で始まる達筆な送る言葉を書いてもらった。

四年生からそれまでの星組から雪組に変わり、そして鉄筋コンクリートの真新しい新校舎に移った。嬉しくて廊下や階段を走り廻ったものである。校長先生も出水先生に替わった。二年間の担任は、若い土井麻紗

子先生で友達みたいな先生だった。この頃は、ゴム球を素手で打つ「三角ベース」野球(一塁と二塁しかない)が大流行し、放課後は全てこの遊びに熱中した。そして六年生の担任は親分肌で貫禄のあった馬場弥三次先生。一番懐かしい先生である。当時はまだ電気屋さんとか一部の家庭にしかテレビがなく、土曜日の授業前に馬場先生が前日金曜日のプロレス中継の解説——力道山がルーテーズに如何に強烈な空手チョップを乱打しノックアウトしたか——を身振り手振りで再現してくれたものである。修学旅行は伊勢へ。伊勢神宮や五十鈴川などに行つたはずだが、ほとんど覚えていない。二見浦の夫婦岩を背景にして級友の前田君(千里山会の名簿に載っている四方哲夫君、上田伸子さん、桜田るりさん、今頃皆何処でどうしているのだろうか?)と一緒に写っている古い白黒の写真がある。

私自身は神戸の中学を受験して多くの級友とは卒業後離れてしまったけれど、千里第二の思い出は楽しいことばかりであった。佐井寺の野山を駆け巡り、竹藪の筍や渋柿を採ったり、溜め池のフナ釣り、関大のグランドまで出かけては馬術部や相撲部の学生に遊んで

もらった。2B弾や手製の手裏剣を投げ合つて子供同志の戦争ゴッコをしたり……ああ、懐かしい!!今でも、「轟く轟く、あの足音は、ぼくらの仲間だ——探偵団! 胸に煌めく誓いのバクッジ!!」という少年探偵団の行進曲と共に胸がときめく。そして、我々団塊世代は、「光溢れる丘の上、希望の窓が開いている、」の千里第二の校歌を永遠に暗唱しているのである。

